

# 妄想ラジオ

*Kanon & Yojiro*

---

麻生ミカリ

*Mikari Aou*

termity



エタニティ文庫

## 目次

妄想ラジオ 5

もう、そう……するしかない 309

妄想ラジオ

## 第一章 現実には妄想より奇なり！

いつもの軽妙なテーマソングが流れて、マイクのスイッチがオンになる。タイムキーパーの寺岡てらおかさんが右手を上げた。

「こんばんは、今週最初の the Lust for Radio 略してラスラジ！ 皆さん週末はゆっくりできたかしら？ ワタシは今日もとっても元気よ！ イニシャルもDJ、神野じんのだいご大都です。今夜も一時までの三時間、アナタの心につぶり沁み込む音楽とトークをぶちかましちゃおうわよ」

少し掠れた不思議な響きの声で、大都がオープニングのあいさつをして、私を見る。

「こんばんは、今日は親知らずが痛くてちよつと涙目な青木あおきの奏音のんです。親知らずって、皆さんは抜いたことありますか？ 私はまだ抜歯経験がないので、歯医者さんに行くのもビクビクしてます」

「カノンは怖がりなのよ。ワタシは親知らずなんてもう抜いたから、そんな不安はさっぱりないんだけどね」

「神野さんは、ほら、なんていうか、ニュータイプですからね……」

「ちよつと！ 今、なんか嫌な言い方だったわね!? それって偏見じゃないのっ」

目の前にいるのは、まぎれもなく男性——それもどちらかといえば整った顔立ちの人の。大都は仕事中、完全にオネエ言葉で通っていて、それがリスナーに安心感と興味と笑いを与えているらしい。

「週のはじまり月曜日、今日はまず BeRoad の新曲。売れてるらしいわね、ワタシも結構好きよ。いきましょう、BeRoad の『デンジャラヴ』、カモン——」

マイクのスイッチがオフになると、大都は、ふうつと小さなため息をついた。私は右頬を押さえて、じくじくと痛む親知らずをもてあましつつ、鎮痛剤が早く効いてくれることを祈る。

ラスラジ——the Lust for Radio は、FM TKO の月曜から木曜、二十二時から一時までの三時間、音楽をメインにさまざまな企画を発信する人気番組だ。私がラスラジの月曜アシスタントになったのは、昨年の四月だったから、今月で早くも一年一ヶ月。週一回のアシスタント業務は、慣れ親しんだスタッフや大都との連携で、いつも快適に務められる。ラスラジでは曜日ごとにアシスタントの女性が違うのだけれど、新年会や忘年会で全員集合するので、ほかの曜日の人とも今ではほとんど顔見知りだ。月曜が私、

青木奏音。火曜の櫻原海ちゃんは、三年目のベテランさんで、局のアナウンサー。水曜の深山明日香ちゃんは、私の一ヶ月後に始めたから、ちょうど今月で丸一年。普段はモデルやタレントの仕事をしている。そして木曜の田中永見さんは一番新人で、声優が本業らしい。らしい、というのは、まだ私は田中さんに会ったことがないから、噂でしか知らないのだ。田中さんは先月からラスタジの木曜担当になった。それまで木曜アシスタントだった佐久間さんが、結婚を機に海外へ移住することになり、かなり急いで次の担当を探したと聞いている。

「カノン、右頬だいぶ腫れてるじゃん。大丈夫かよ」

仕事が終わると、大都是男性口調に戻る。頬に触れそうなほど指を伸ばされ、私はハッとして体を引いた。

「もう！ またすぐ触ろうとする！ 大都のそれって、セクハラだよ」

「これだけでセクハラ？ まじ？ セクハラってスカートめくったり、おっぱい触ったりじゃないの？」

「こら！ そういうこと言うのもだめ！」

いたざらっ子みたいな目をして、大都是微笑む。この人に恋をしていたのはまだ余韻が残る思い出だ。誘えばベッドまで付き合ってくれるけれど、絶対に心を開いてくれな

いし、恋愛関係にもなれない大都。セックスフレンドみたいな関係は、二ヶ月ちょっと続いた。結局、私は大都とベッドで味わう一瞬の快楽より、自分を愛してくれる男性を見つけることを選んだ。関係の清算は簡単だった。

『もう、こういうふうに会えない』

そう言いながらもどこかで引き止めてくれることを祈っていたけれど、大都是にっこり微笑んで、

『オーケイ。カノン、今までありがとな。これからも仕事ではよろしくっ』

と右手を差し出した。終わりに、慣れてる。そんな彼だからこそ、今でもこうしてわだかまりなく仕事上のパートナーでいられるのだけれど。

「それ、歯医者行ったほうがいいぜ」

「明日行ってくるつもり」

「下の歯だろ、それ」

「うん」

「抜くのツライから覚悟しとけよ。俺、左抜くとき、すっげえ痛かったから、右は全身麻酔でやってもらったもん」

「えええええ、そんなにひどいの？」

「おまえ、ちゃんと曜日を考えて抜歯の日程組めよ？ 抜いたあと数日腫れるし、口開

かないから仕事になんねえぞ」

「ううう、わかった……」

仕事は楽しいし、週一度、月四日か五日の勤務でも、実家で暮らしている私には十分な報酬が支払われている。恋人は——相変わらずいないけれど、別に彼氏がいないかつて楽しく生きていくことはできるんだから、そこまでガツガツ恋愛を求めつもりはない。

……本当は恋愛体質で、恋愛依存症気味なんだけど、普段はそういう自分を出さないように頑張ってる。でも外で頑張る分、家にひとりでいるときはたっぷり妄想するんだ。恋愛小説、少女マンガ、ケータイで電子書籍を読むこともある。どれもこれも、甘くて切なくて幸せな恋を疑似体験させてくれるから、私はそれを元にすてきな恋の妄想を繰り返す。妄想なら、『彼』が私を傷つけることはないし、私が嫌がる言葉を口にすることもない。それに浮気だつてしないもの。私の脳内のミスター・パーフェクトは、アーモンド型の目をして、眉はきりっと、鼻筋はすうつとっており、優しいラインの唇があたたかい笑みをつくる。そして、甘い声で私の名前を呼んでくれるの。

『カノン、今日もお疲れさま。君がいなくて寂しかったよ。僕のことを一日忘れずにいてくれた……?』

もちろん、忘れるわけない。誰もいないベッドに入って、まだ少し濡れている髪が冷たいなあなんて思いつつも、私は『彼』との時間があるから幸せでいられる。もちろん『彼』は、その日の気分で野獣みたいに私を欲したり、少し謙虚でおとなしかったり、あるいは異国の王子さまみたいにジェントルだったりする。私の気分次第で、どんなキヤラクターも演じてくれる、『彼』——。彼さえいれば、私は幸せ。ベッドの中で、スタンドライトをつけて恋愛小説を紐解く。マンガも大好きだけど、小説のほうがもっと好き。だつて文字のみで書かれている小説なら、『彼』をそのままヒーローに当てはめて読むことができる。どの物語も、私と『彼』の物語に変換して楽しめるんだ。

「あーあ、あなたが本当にいたらいいのにな」

ベッドの中、読み終えた本を枕元に置いて、私は胸の奥にいる『彼』に語りかける。もちろん、それが一人遊びなのはわかっている。だけど、現実の恋愛は悲しいことや寂しいこと、切ないことがたくさんありすぎて、私は疲れてしまったんだ。

最後に別れた恋人は、三ヶ月前、私を抱きながら言った。

『奏音、俺たちただのセフレにならない? 俺、好きな女ができちゃったんだよね』

今にもイキそうな真つ最中にその言葉。彼は、私のカラダが一瞬で冷静さを取り戻したことにも気づかず、腰を振り続けた。心と体が完全に醒めてしまえば、そこには快樂なんてない。ただ体の中でなにかが往復しているだけのことだ。

『俺たちつて体の相性抜群だし、俺、アイツと付き合ってもたぶんすぐ別れると思うん

だわ。だったら奏音と切れるのやなんだよ』

それを聞く私の心がどれだけ傷ついているか、彼にはわからないのだろう。いつも本当のことを口にしない私の、悪い癖。本当に好きなわけでもないのに、付き合っていた私も悪いんだとわかっている。心から好きになった相手に好きになってもらうのは難しくて、でもひとりぼっちでいるのは寂しくて、つい声をかけてきた彼との付き合いをOKしてしまった。その挙句がコレ。こんな目にあうのなら、私は妄想の中の『彼』と過ごすほうがずっといい。

そろそろ眠ろうかと、スタンドライトを消した。ベッドの中で寝返りを打つと、右頬にずきんと痛みが走る。うう、これ絶対ヤバイ。明日にでも歯医者へ行かなくてはと思うものの、あのキュイイイイイイイイイイイという音を想像しただけで耳を塞ぎたくなる。……いやいや、でもいい大人なんだし、歯医者が怖いと言っつられないし。だけど、ものすごく憂鬱すぎる！

「ああ、これはここじゃ無理だねえ」

通い慣れた歯科の先生は、しわのよる目元を細めて、私の口の中を覗き込んだ。無理ってどうしたらいいの。ここ以外の歯医者さんなんて、行ったことないのに。

「大学病院の口腔外科、行ったことあるんだっけ？」

「ないえす」

口を開けたまま返事をしたせいで、ヘンな発音になる。ないですないですないです！「じゃあ紹介状出します。早めに行かないと、大学は予約で混んでるから大変だよ」笑いじわつぷりの優しい顔で微笑んで、先生が席をはずす。

私の親知らずは、まっすぐ上に伸びるのではなく、歯茎の中で手前の奥歯の根に向かって伸びていた。つまり、歯茎を切開してその中の歯を取り出すという処置が必要らしく……。ダイガクビヨウインですって？ 駄目だ、考えただけで憂鬱になってくる。

『カノン、そんなに心配しなくても僕がついてるよ』

脳内ダーリン、あなたはいつでもついていてくれるけれど、痛みは物理的にこの身に降りかかるのよ。

歯茎を切り開かれることを考えるだけで、頭の中が血まみれになりそう。

『愛してるよ、カノン。早く歯を治して、ゆっくり愛し合おう』  
ううう、愛し合いたい。だけど、歯を抜くのは怖い。

ひとりぼっちは寂しくて、ふたりぼっちになるのは怖くて、結局私はなにをしたいんだらう。

恋愛依存症、二十四歳独身、実家住まいのフリーター……。青木奏音、人生で初めて、

歯を抜かれることになりましたっ。

そこで運命的な出会いをするなんて、そのときの私はまだ知るよしもない。だけど神様だけは知っていた。妄想から現実につながる、この恋の行方を。

\*\*\*

その二日後の木曜日、重い足を引きずるようにしながら、私は大病院に到着した。古めかしい建物に、新築された別棟が無理やりくっつけられていて、なんだかいびつな感じがする。自動ドアを通り抜けて、新患受付で手続きをすると、私は別棟にある口腔外科へと向かった。

それにしても、親知らずを抜くってこんなに大変なのね。今まで抜歯経験なんてないし、ましてや口腔外科なんて来たこともなかったけれど。

平日の朝早い時間に来たというのに、待合室はすでに混み合っていた。診察券と紹介状を受付に出して、私はあいているベンチに腰かける。うー、駄目だ、気持ちを落ち着かせねば！ バッグの中からブックカバーをかけた恋愛小説を取り出して、読みかけのページを開く。恋愛小説さえあれば、ううん、ないときだって自家発電モードで妄想さえすれば、嫌なことなんかすぐに忘れられる。

今日の『彼』は企業のエリートサラリーマン。最初は冷たかったのに、新人秘書の私にだんだん心を開いてくれる――

「青木さん、青木奏音さん、十二番にお入りください」

妄想に浸っていたところで、名前が呼ばれた。私は慌てて本をしまうと、コートとバッグを手に診察室へ向かう。十二番って、言ったよね？ どこだろうと思いつながら診察室内をきよるきよると見回す。診察室内はオープンスペースになっていて、それぞれの診察スペースがパーティションで区切られている。しかも、医師が、すぐたくさんいるんですけどっ。二十二番診察室まであるこの口腔外科は、マスクをつけた白衣の医師たちで埋め尽くされている。その合間にちらちらと患者がいる感じ？

「青木さんですか？」

その白衣軍団のひとりが私に近づいてくる。マスクはつけているけれど――

「は、はいっ」

目の前に立つその人は、爽やかな雰囲気、短い髪、きりつときれいなラインを描く眉、アーモンド型の目に、透き通るような白目……。そう、私の脳内ダーリンであるミスター・パーフェクトのイメージ、そのものだった。

「親知らずが歯茎の中で伸びてしまったケースですね」



口元はマスクで見えないのに、目元だけでわかる美形っぷり。疲れているのか、目の下に少しくまが！ それでも顔のよさは損なわれていない。

「はい、そうです」

平静を装って返事をするものの、心拍数は異常値寸前！

『カノン、やっと会えたね』

脳内で『彼』は私をきゆうっと抱きしめる。その腕の中で、私は幸せの涙を……

「青木さん、口開けてもらっていいですか？」

「はいっ」

駄目だ、とりあえず今は妄想している場合じゃない。思い切り口を開けた顔を見られ、さらに口の中まで丸見えというひどい姿を、初対面で晒すことになるなんて——まあ、仮にまともな姿で出会ったとしても、私なんか無理ですよ。わかつてる、妄想と現実とは違うってわかっているの。現実の恋はそんなに簡単なものじゃない。それでも未練がましく彼を見つめてしまう。白衣の左胸についた名札には、『三浦洋二郎』と書かれている。三浦せんせー。洋二郎さん。ようちゃん？

「ここは痛いですか？」

「うっ」

「すいません、痛そうですね」

金属の棒状のもので、歯茎をつつかれて、私は一気に現実に戻された。

『カノン、今はとりあえず口腔外科医と患者という立場をわきまえないといけないけれど、本当は初めて見た瞬間から君を——』

ああああ、駄目、どうしよう、脳内妄想が暴走し始める。とまらない妄想。

『この診察用の椅子の上で、君を思い切り抱きしめたいよ』

『三浦先生、そんなこと……』

『君が欲しくてたまらない。今すぐに、ここで』

『ぞ、そんな、いけませんっ』

『大丈夫ですか？』

「へ!？」

「一度うがいでください」

「だ、大丈夫です。うがいですね」

「はい」

どこか笑いをこらえたような表情で、三浦先生が私を見つめる。ううう、そのきれいな瞳で見ないで。

私の脳内妄想、少しでいいからおとなしくしてよっ。見透かされてたら、恥ずかしくない！ 欲求不満だと思われちゃうか。……すみません、欲求不満なのは認めま

すけどね。

私は心を落ち着かせようと、ぶくぶくうがいをして、水を吐き出す。あの、お願いですから、こんな姿をじっと見つめるのはやめてください！

「手前の奥歯に食い込むように伸びているので、抜歯しないとイケませんね。右だけじゃなく、左も抜いておいたほうがいいと思います」

「はい」

マスクはずさないかなー、口元も見てみたいんだけどなー。私は、彼のマスクをじっと見つめる。

「常用しているお薬とかはありますか？」

「いえ、ないです」

そのマスクをはずして、甘いキスを私に——駄目、さすがにこんなに人がいるところで、しかも彼の職場でそんなことできるわけない。でも、ぎゅっと抱きしめられたら、きつと白衣のゴワゴワする感触が頬にあたるんだらうな。そして髪なんか撫でられて、耳元でその優しい声で名前を呼ばれちゃったりして!!

「まず、右側の抜歯の日程なんですが、来週の月曜はいかがでしょうか？」

急にそう言われて、私は必死で妄想をごみバケツに押し込み、ふたをする。なんでし

たつけ、日程？ そうそう、抜歯の日程ね、えーと。

「月曜は仕事があるので、できれば火曜日にお願いしたいんですけど」

「火曜ですか。では、来週の火曜の朝はどうですか？」

朝から、この麗しいお顔を見られるの？ いやーん、絶対来る！ 嬉しいっ。

「はい、大丈夫です」

心の中は激しく興奮状態だけど、表面上はなんとか穏やかに笑みを浮かべた。それにつられるように、三浦先生も微笑み返してくれる。目元が少し緩むだけで、こんなに幸せな気持ちにさせるだなんて！ さすがミスター・パーフェクト、あなどれない……

「では来週火曜日、朝九時にお待ちしますね」

「はい」

「当日は、麻酔を使用しますが、体質によっては気分が悪くなる可能性もあります。朝食はあまり食べ過ぎないようにお願いします」

「わかりました」

むしろ朝ごはんはア・ナ・タ、なんて！ いや、ちよっと落ち着いて、私。さつきからひどい暴走っぷりだけど、まずはマスクの下のご尊顔を拝見してからでしょ！ いくら目元がいい男だからって、口元は出っ歯でものすごいタラコ唇というオチだつてあるんだから、完璧な理想の顔だなんて思い込んじゃ駄目よ。……そもそも、ここまで完璧

な顔立ちをしていらつしやつた場合、すでに彼女なんか山ほどいて、私の入り込む隙間があるわけないんだけどね。

「ところで青木さんって、もしかしてラスラジの……？」

「は、はい、そうですね」

うわわわわわ、知ってたとは！ さすが人気番組、ラスラジ……

「名前を見て、もしかしてと思ったんですが、声も似てるから、僕、結構聴いてますよ」

「ありがとうございます」

「前からあなたの声を聴いていて、僕の好みだつて感じていたんですよ。よかつたらふたりきりで食事でもどうですか……？」

「はい、もちろんです。私も初めて会ったときから、三浦先生のこと……」

——つて、そんな展開はさすがに脳内だけなだけで。うーん、この超絶イケメンの三浦先生までもが聴いているだなんて、ラスラジ様<sup>サマ</sup>様としか言えない。

「ではお大事になさってくださいね」

にっこり、目が線になるような笑顔で、三浦先生が立ち上がる。うん、わかつた……。現実当然、こつちだよ。でもいいの、今夜は帰つたらひとりであつたつぷり妄想を楽しんでから！ できたらマスクをはずしてもらいたかつたけど、仕方ないよね。

「ありがとうございます」

私は深々とおじぎをして、横のかごに置いていたバッグとコートを手を手に診察室をあとにした。

帰りのバスに揺られながら窓の外の景色を眺めていても、気づくと三浦先生の姿を思い浮かべている。なんていうか、あまりに理想そのものすぎたのよ！ だから仕方ないでしょ？ つて、自分に言い訳してどうする！ ……私つてば、まだ取り乱してる。

「そんなに慌てないで、カノン。僕はいつでもそばにいるんだから、ゆっくり恋をしようよ」

『だって、やつとあなたに会えたから、嬉しくて』

『かわいい子だね。今すぐに食べてしまいたくなる』

なああああああんちゃって！ 自分でも恥ずかしくなることを想像して、視線を膝の上に落とす。くうう、あの美形つぷりはまずい。妄想趣味の私じゃなくても、甘くとろける妄想をしてしまうに違いない。あー、もう、どうしよう。むしろ、どうされちゃおうかしらっ（妄想的に）。

今日は木曜日だから、次の火曜日の朝に……。つて、え、ちよつと、火曜の朝つて！ 月曜の夜二十二時から一時までオンエアがあるから、私が帰宅するのはだいたい火曜の午前四時ごろ。それで九時に病院とは、結構鬼畜スケジュールじゃないの。ばかばか、

カノンの馬鹿！ 浮かれすぎて火曜の朝はまずいってことを忘れるとは。

『でもそんなところがかわいいよ』

って、そこはかわいくなくてもよろしいっ！

\*\*\*

『俺のカノン、かわいい君の口の中を切るなんて、俺にはできないよ……』

『うん、洋二郎さんにこそ、切ってもらいたい。だってほかの人に、お口の中を触られるなんて、イヤなもの』

私は目を伏せて、彼の白衣の袖をきゅっつつかむ。彼は我慢できないという様子で、少し強引に私を抱き寄せた。

『そんなかわいこと、言わないで。絶対、誰にも触らせたりしないから』  
『うん、ずっと、洋二郎さんだけのカノンでいさせて——』

うへへ、いい感じにラブイ展開だ……。とか思っていたら、いきなりパコーンと頭を叩かれた。

「頭おかしくなるほど、鎮痛剤のんでんの？」

「いや、おかしくないし」

大都に台本で頭を叩かれても、私の中のあまゝい妄想は熱を失わない。もう本当にね、三浦先生に出会ってから妄想が止まらなすぎて、常に暴走列車状態だよ。

「明日、抜くんだよ」

「そうそう、だから今夜は終わったらすぐ帰るよ」

「送ってやるうか」

「いらぬ。タクシーで帰る」

月曜の夜、二十一時半。オンエアまで、あと三十分ほど。私は、大都とスタジオで向かい合って座っている。こうして見ると、大都は特別きれいな顔をしているわけじゃない。霧囲気がいいからかっこよく見えるんだな、と思う。一年前はこの人がすごく好きで、どうしたらセフレ以上になれるか悩んだ。でも今は、もう仕事の相方以上の感情はない。それよりも、三浦先生を妄想するのが楽しいし……

「さて、そろそろスイッチ切り替えるわよ！」

大都がオネエ言葉でそう言って、右手を頭の後ろに、左手を腰にあてて、悩殺ポーズをとる。まだ早いんじゃないの、と声が聞こえる。A Dの塩谷くんだ。

「あら、ワタシのこの悩殺ムードがラスラジの売りでしょ！」

「はいはい」

「ちよつと、カノン！ アシスタントならもつとワタシを盛り上げなさいよっ」  
 仕事モードに入ると大都是完全に別人だ。いや、ちよつと皮肉っぽいところや、人からかうところは変わらないんだけど。口調が違うと、ここまで別人に思えるんだから不思議。

「あえいうえおあいうえおーん！」

裏声でおかしな発声練習をして、大都是ゲラゲラ笑っている。うーん、なんでコイツを好きだったのか、当時の自分に少し疑問を感じる。ちよつと強引で、女の子をからかうのが好きで、確かに一緒にいると楽しい相手だった。ベッドでの相性も悪くなかったし？ 月曜の仕事が終わると、大都のマンションと一緒に帰って、朝まで楽しむだけのお付き合ひ。でもやっぱり私は、恋がしたかった。……まあ、結局してないけど。まだしてないだけで、もしかしたら三浦先生とあま〜いロマンスが始まっちゃうかもしれないでしょ！

『もう始まつてるんだよ、カノン』

脳内に、私の髪を梳く『彼』の姿が浮かぶ。甘い囁きに、思わず目を閉じて彼との妄想を堪能……いやいやいや、今はマズいでしょ！ そうそう、さすがにお仕事の場そんな妄想したら、ね！

「カノン、欲求不満なんじゃないのかしら……。最近様子がへんなのよ」

マイクチェックに来ていた塩谷くんに、大都是しなだれかかるようにしてそう言った。欲求不満なのは認めるけど、妄想好きなのはもともとなんだからね。今に始まったことじゃないもん。

「青木さん、困ってるなら相談にのりますよ」

「遠慮します！」

ぷいっと横を向いて、私は壁にかかったカレンダーを見つめる。明日の朝には、三浦先生に会える。妄想はいつだって甘く幸せだけど、そろそろ現実の男の人の温度を感じたいのも事実。私は幸せな恋がしたかった。現実にはありえないとわかっていても、物語のような恋にあこがれる。そして、それと同時に『どうせ私なんて愛してもらえないわけがない』と、自分の願望を打ち砕く——いつもその繰り返しだった。恋したい。愛されたい。だけど、怖い。愛する人に私なんか不要だと言われることに怯えて、妄想の世界に閉じ込める。

仕事が終わって、タクシーで帰宅したのが三時、それからシャワーを浴びてマニキュアを塗りなおして五時……。これは、眠ったら起きられないパターン!? そもそも仕事が遅い時間帯なこともあって、私の生活時間はかなり夜中心。特に月曜の夜（というべきか、火曜の朝というべきか！）は、大体が明け方に眠ってお昼くらいに起きるのに。

でも、今日は九時に大学病院の口腔外科こうくうげかに行かなくてはならない。三浦先生に会えるんだもの！ って、だいぶ頭の中がお花畑だけど、大丈夫なのかしら、私……

『大丈夫、そんなカノンがかわいいよ』

やっぱり!? 恋する乙女モードで頑張るしかないよね。

『その恋してる相手が、僕なら……いくらでもおかしくなってくれていいんだよ?』

『やん、三浦せんせえ……』

よし、これは寝過ぎささないように朝まで本を読んで時間をつぶすしかない。私はお気に入りへの恋愛小説を手にして、ベッドに横になった。

甘い甘い、恋の話。

現実じゃ味わえないようなハラハラドキドキの展開と、それを上回る幸せな結末。前に付き合っていた彼は、『そんな気持ち悪い本、小説って呼べねーよ。カノン、なんでマンガとか恋愛小説ばっか読むわけ?』なんて、ひどいことを言った。

私は確かに恋愛小説が大好きだけど、それによって誰かに迷惑をかけてるわけじゃない。ひとりでこっそり楽しむくらい、自由じゃないの。男の人だって、えっちな本とか見るでしょう? それに比べたら、かわいいものだもん。とろけるような恋の物語。ヒロインは愛されて、幸せになる。私はまだ、そんな幸せをつかめないままにいるけれど、

いつかは、もしかしたら、なんて思う気持ちもあるんだ。女の子なら、誰だってそうだしよ!

\*\*\*

八時半過ぎに病院に到着した私は、トイレに行つて入念に自分の姿をチェックする。髪よし。眉、ある。アイライン、ずれてない。マスクラ、とれてない。口紅、ぶるつぶる! もとの素材がもう少しよかったら、と思う気持ちはあるけれど、できる限りかわいくした! あとは攻撃あるのみなんだからねっ。

「青木さん、青木奏音さん。四番診察室にお入りください」

待合室のベンチで、いつもどおり恋愛小説を読んでいると、三浦先生の声がスピーカーから聞こえてきた。私は小説をしまうと、コートとバッグを手にして診察室に入る。

四番はー、どこかしらー。

「こっちですよ」

「は、はいっ」

きゃー、いきなり三浦先生登場! 今日はこの間より、ちよつとワイルドな感じがす

る。じつと凝視すると、ヒゲが！ マスクの脇から見える少し伸びたヒゲ、これがワイルドの理由だったのね。

「座ってください」

そう言われて、私は診察台というか、診察椅子というか、可動式の台に座る。頭の位置を合わせてから、あ、バッグ！ コート！ まだ手に持つてる、どうしよう。

「こつちに置きますね」

ぱっちりアイメイクの看護師さんが、それに気づいて私の荷物をかごに入れてくれた。気遣いのできるかわいい人が、こんな近くにいるとは……。ライバルかしらと、ちらちらその看護師さんを見てみると、三浦先生が私のそばに立った。

「体調はどうですか？」

「はい、普通です」

「眠れなかったとか、食事が食べられなかったとかは？」

「ないです」

「じゃあ、食べ過ぎたとかはどうですか？」

「え、えっと、それもないです」

そう答えた私に、三浦先生はにこつと微笑む。百万ドルの笑顔を、そんな簡単に振りまかないでくださいっ。悶絶もんげつして具合が悪くなりそうなくらい、威力のある笑顔なの……

「麻酔をかけて、今までに気持ち悪くなったことはありませんか？」

「特にないと思います」

「わかりました。じゃあ始めましょう」

あ〜ん、始めちゃってくださいっ。

本当は睡眠不足で朝食も摂ってなかったけれど、私は三浦先生の美しい笑顔で心がいつぱいだった。

心臓がばくばくしてきた。今日はメイクもぱっちり！ 多少かわいくて胸も大きくて目もぱっちりしてる看護師さんがそばにいたって、負けない！ いや、ウソ。勝てるわけないけど、少し強気になってみただけだよ……

「すみません、口紅だけ拭き取っていただいていますか？」

な、なんだって!? さきほどのおめぱっちりメイクな看護師さんが、私にティッシュペーパーを差し出す。

「あ、はい」

まあ、そうだよ。今から口の中に手を突っ込むってときに、口紅がびしびし塗ってあったら邪魔だよ……。私は素直に口紅を落とす。ぷるぷる唇よ、さようなら！

「じゃあ、下げますね」

そう言われた途端、台がぐぐーっと下がる。そして私の目の前に、三浦先生のご尊顔が！ヒゲがちよっと見えるワイルドな姿もステキなので、そんなに見つめないでください。

「器具を使いますので、タオルのせますね」

「は、い？」

目を覆うよう顔の上にタオルをかけられて、麗うるわしのお顔は見えなくなつた。器具。いやん、そんないきなり器具だなんて！とか言ってる場合じゃなくて。そうだよ、抜歯するんだよ。思い出して背筋がゾツとする。うーんうーん、器具ってアレですよ、切つたり、こじあけたり、割つたりするための、いろんな器具なんですよね……

「吸引お願いします」

「はい」

吸引……私の唾液だえきを吸引するんですよ？ 吸引するほど大量の出血があるとは思いたくない！

「青木さん、今から右下の親知らずを抜きます。麻酔をかけますが、痛いときは遠慮なさらずにうーでもあーでもいいので、なにか言ってくださいね」

「……はい」

口を開けると、三浦先生の指が私の口の中を探る。くうううう、抜歯するんじゃないけ

れば、妄想しまくりの状況なのに。

「ちくつとします。我慢してくださいね」

そして、麻酔が私の口の中に……。ちくつとなんてもんじゃなくて！ちぐつときたんですけど!? 痛みをとるための麻酔が痛いとは、どういうことなおお。

——そして、恐怖の時間が訪れる。

口の中は、右側がきっちり痺しびれていた。舌の付け根あたりから右半分は触れられてもよくわからない。うー、抜歯、抜歯ですよ、わかってますよ。

「気をラクにしてください。大丈夫ですよ」

と、言われましても！私は両手をおなかの上で組み合わせた状態で、口を開けたままタオルに目を塞がれている。特殊な台に乗せられて、目隠しをされているだなんて、いつもならちよつとした妄想の材料なのに！今の私には、さすがにそんな余裕もないっ。

口の中を、三浦先生が指で色々触ってみて『痛くないですか？』なんて聞いてくる。シユイイイイイイイイイイイ。思ったよりもひどくない器具の音に、私はほつとした。痛みもないし、切られている感覚も皆無。とりあえず私はそこまで怯えずに、すべてを三浦先生にまかせてここで口を開けていれればいいのよね？



『そうだよ、カノン。なにも心配することはないんだ。全部僕にまかせて』  
うん、わかった！

「吸引してください」

「はい」

三浦先生と看護師さんの会話が聞こえたと思ったら、唾液だえきを吸引される。いやん。つて、本当にそれ唾液なの？　なんか口の中に、いろんな液体があふれてる感じが……

「しよっぱいお水で口の中を洗いますね。痛かったら言ってください」

はい。いや、返事したいけど声出せないし。冷たいなにかが口の中でびゅうううつと発射される。それがしよっぱいのかどうかわからないのは、舌の右半分が痺れているせいだ。さっきのシユイイイイイイイの器具が戻ってくるのかと思っていたら、吸引されまくったあと、今度はギユイイイイイイイイイが来た。低く振動するような、ギユイイイイイイイイイイイイ。

「う!?」

口の中で起きている大工事に、私は思わず声をあげる。痛いわけじゃないんだけど、音に怯えてしまうんだ。

「大丈夫ですか？　痛いですか？」

声は出しづらいので、私は首をかすかに横に振る。いや、痛いわけじゃないんです。

でもなんていうか、音が痛いつていうか。

音はすごいのに、痛みはまったくない。麻酔つてすごい、ビバ麻酔！　しかし、ものすごい振動が、伝わるのですが……？

「麻酔追加しましょうね」

歯茎の奥深いところに、一瞬だけ痛みがあった。けれどそれも、すぐに忘れる。口の中では、さらに異なる音が発せられていた。ギョイイイイイイイイイイイ。口内大改装でもしているんじゃないかと心配になるほど、ありえない音が体の中で反響している。痛くない、痛みはないんだけど……

『大丈夫だよ、かわいいカノンに痛いことなんてするはずないだろ?』

うん、信じてる。でも音が怖いんだよう。

『怖くない。ほら、僕が抱きしめていてあげるからね』

タオルで目隠しされたまま、私は目を閉じて自分の妄想の世界に入り込む。そうでもないしないと、とても耐えられないくらいに、すごい音がしているんだもの。

シユイイイイインとかキユイイイイイインとかギョイイイイイイインなんか落ち着いたあと、今度は口の中でのなが私の歯をつかんで引つ張り出そうと……!?!  
「んっ」

「すみません、ちょっと衝撃があるかもしれません。それと、音がするかもしれません

けれど、大丈夫ですからね」

さつきから大丈夫大丈夫って言われているけれど、本当に大丈夫なの、私!? だってパキッとかがパキヤツとか、カンカントントンいろんな音がするのよ。右奥歯をなにかでつかまれる感覚、そしてそれを引つ張ろうと……? 唐突にカシツ、と音がして、つかまれていたなにかが口から抜き出される。

「吸引お願いします」

「はい」

「丁寧に、奥までたまってますから」

「はい」

なにがたまってるのおお!! 唾液だえき以外、ありえないですよ。でもあきらかに、いつもと違う鉄っぽい匂いがする。……舌は麻痺していて、味がわからないから助かったかな?

『カノン、もう大丈夫。君を苦しめた親知らずは抜き終わったからね』

「青木さん、お疲れさまです。親知らずは抜きましたので、今から縫っていきますね」

「ふあい……」

うーそーそーきー、ダーリン、もう終わったって言ったのに、今から縫うって言うてるじゃないかああ。

『ごめんよ、君があまりにもつらそうで……』

まあ、私の脳内ダーリンは実際の三浦先生と違って、口腔外科医こうくうげかいではないから仕方がない。いいよいいよ、怒ってないよ。

『本当かい? よかった、君に嫌われたらもう生きていけないよ』

いやん、そんなに抱きしめられたら苦しいじゃないっ。

そして口の中を縫う感触。うん、これは三浦先生の現実の手……

気づくと、私は口を半分閉じかけていた。っていうか、寝てた!? 今、絶対寝てた。ひい、バレてませんように。私は思い切り、口を大きく開けなおす。傷口を縫ってもらってる最中なのに、口半分閉じるとか、駄目だし!

「そんなに思い切り開けなくても、そろそろ終わりますからね。くつろいで大丈夫ですよ」  
 ぜーったい寝てたのバレてるでしょ、これ! 穴があつたら入り込んで、三年くらいその中にいたい……

「青木さん、痛みはなかったですか?」

「はあ」

はいつて言ってるつもりなんだけど、口を開けっぱなしだから、まともな音にならない。なに、この、やる気のない返事。

『大丈夫、わかってるよ』

うわあん、現実の三浦先生はわかってないよう。恐怖のせいかな、冷たくなった自分の指先をきゅうっと握りしめる。いやはや、抜歯って時間がかかるものなのね。結構長い間、口を開けていた気がする。歯茎は麻酔で痛みを感じないけれど、顎が痛いもん。こんなに口を開けっぱなしにしていたことなんて、今まであったかな？——ああ、なかなかイッてくれないカレシを口で必死でしてあげるときは、結構長く……って、今そんなこと思いたくなくなあああい！

そこで、いきなり私の視界に光が戻る。輝かしい未来が……って思ったら、単にタオルを取り払われただけだった。

「お疲れさまです。お口をゆすいでください」

光を取り戻した世界で、三浦先生が微笑んでいる。見目麗しいみめうるわとは、こういう人を言うのですね、神様。

「はい」

椅子を起こされて、私は感覚のない口に水を含む。ぶくぶくぶくぶく、ぺつ。え、ちよつ、真つ赤！ 血だよ、かなりの血だよ!! しかも口の右半分が麻痺してて、唇の感覚もないから、ぶくぶくしてるときに気をつけないと水が飛び散るよ！ うえうえ、気持ちわるいいいいい。

「しばらくは出血が続いて、口の中に血がたまります。ガーゼを噛んでいても、血そのものはたまってしまうので、うがいはいまめにしてください。ですが、あまり強くうがいをすると傷口によくないですから、適度にお願しますね」

「は……い」

あ、まずい、貧血起こしそう。だってこの血の量は、見ただけでヤバイって、うん。

「青木さん？」

「は……」

返事をしようとしているのに、私は体のバランスが取れなくて、口の周りに血液と唾だ液えきをつけたまま、ふらりと三浦先生に倒れ込む。あー、頭がぐらぐらする。視界がまたも真つ暗じゃないの。駄目だ、もう限界、寒気がする。

「青木さん、青木さんっ」

頭の上から声がする。でももう目が開かない。このまま眠ってしまいたい……

麻酔をかけてください。

『もう麻酔はかけているはずだけだな』

ううん、あなたのハートに麻酔をかけて。私以外の存在を感じなくなるような、麻酔を。『僕はもう、君だけのものだよ。最初から、ずっと君だけのものだったはずだ』

『何千年も前から君だけを愛していたよ』

『あの夏の日から君だけを見つめている』

『愛してる、カノン。君が僕の実の姉だとしても、この思いは止められない……』  
幾人もの『彼』。

そして、いくつもの物語が交差する。あまりにも幸せな夢の中で、私はきゅんと切ない心を抑え、彼を抱きしめる。抱きしめたのは、誰だったのか。あるいは、私を抱きしめていたのが、誰だったのか——

心が麻痺して、あなたさえわからなくなるように、麻酔をかけてください。

——知らない天井、だ。目を開けた瞬間、がやがやとたくさんの方が耳に飛び込んでくる。そのほとんどが女性の声だった。なんだろう、どこだ、ここ。えーと、私はなにをしていたんだっけ。

「よく眠ってましたね」

え、ちよ、ちよっと。声のほうを見ると、三浦先生が！ しかもマスクしてないよ？ 口元も、チャージングじゃないですかああああ。少し口角の上がつたきれいな唇に、私は緊張する。初めて、彼の素顔をまのあたりにしていた。

「あの、私……」

「貧血でしょう。血を見て驚いたんですね。それと、睡眠不足。もう十八時ですから、だいぶゆっくり眠ったんじゃないかな」

ひい、十八時ってどういうこと。今日の予約が九時だったから……どれだけ眠ってた、私！

「す、すみません、えーと」

「昨晚もお仕事だったんでしょ？ 実は、僕もラスラジを聴いていて睡眠不足だったんです」

はあ、あの、それはどうもすみません……？ それにしてもマスクなしだと、さらに後光が差しそうなほどの美青年なんです。こんな完璧な美貌、現実に存在するの？ 思わず見とれていた私に、三浦先生が心配そうに眉をひそめた。

「大丈夫ですか？ まだ少しぼうっとしてるみたいですね」

……口の中が気持ち悪くて、さらにものがい激痛がするんです。歯茎というか、頬も顎も喉まで痛い。ミスター・パーフェクトを目の前にしても、痛いものは痛いんだあああ！

「麻酔が切れているから、痛みますよね。ちよっと失礼します」

彼の長い指が私の唇に向かって伸ばされる。その瞬間、脳内に甘美な声が響いた。

『カノン、君にキスしてもいい？』

「そつ、そんな、いきなりっ!？」

「え」

妄想と、現実の区別がつかなくなる。だって、いきなり唇に指で触れるなんて！ き、キス？ キスの前触れでしょ、それ。

「あ、あの、えつと」

顎に添えられた手を意識して、私は後ずさろうとした。ん、なんだ、ここベッド？ というか、病室っぽくない!？」

「唇や舌の感覚を確認したいので、動かないでもらえますか？」

「かわいいよ、カノン、そんなにうろたえて」

えーと、そういうこと？ 一瞬でもキスを期待した自分が恥ずかしくて、私はおとなしく口を開こうとする。だけど痛くて口が開かない！

「唇が痺しびれている感じはありますか？」

「少し……」

三浦先生の長い指が、つうつと私の下唇をなぞる。なんてえろていつくな！ 痛みすら忘れそうに——いや、忘れられないくらい、痛いんですけどね。

「舌はどうですか？」

『その舌に触れてもいい？ 僕の舌で……』

のおおおお！ 妄想ストップ！ ダーリン、このまま妄想を続けるのはだいたい危険よ！

「右側が痺れている感じがします。でも痛みのほうが強いです」

「麻酔も切れてしまっただろうし、痛むでしょうね」

ま、麻酔！ さっき、なんかそういう夢を見ていたような。私はあわあわと慌てふためいている脳内を、必死で落ち着かせる。落ち着け、まず状況確認だ。私は抜歯しました。そして傷口を縫われました。そのあと、うがいをしました。オーケイ、そこまでは覚えてる。で、その次どうしたんだっけ。

『貧血でしよう、血を見て驚いたんですね。それと、睡眠不足。もう十八時ですから、だいぶゆっくり眠ったんじゃないかな』

さっき、三浦先生そう言ったよね。つまり、貧血でぶったおれて、そのまま眠りこけていた、というわけで……

「目、覚めましたか？」

わざとじゃないのかと思うほど近い距離で、三浦先生が私を覗き込む。短い髪の毛が、エアコンの風で少し揺れた。きれいなアーモンド型の目で見つめられると、どうしようもないくらいに妄想が広がりそう——危険だ。

「はい、ご迷惑をおかけしました」

うんうん、大人のあいさつ、いけるわ。微笑んで、歯を噛み合わせると激痛が走ることに気づいた。抜歯……、そうだよ、麻酔が効いていた間はいいけど、歯茎を切り開いて骨にはまっている歯を取り除いたんだから、痛いに決まってる。

「夜になるともつと痛みが強くなるかもしれないので、院内薬局でお薬をもらっておきました。精算のときに薬代も一緒に支払ってください」

「……ありがとうございます」

「鎮痛剤と化膿止めと整腸剤を毎食後、痛みがひどいようでしたら鎮痛剤は四時間あければ一日に六回までのんで大丈夫ですよ」

そんなに薬をのまなきゃならないほど、痛むものなんですか？ でも頭痛や生理痛のときも、鎮痛剤って完璧に痛みを抑えられるわけでもないし、やっぱりのまなきゃならぬんだらうな。

「じゃあ、青木さん」

「はいっ」

「次の予約なんですが」

『僕は、カノンにまた会いたい。来てくれるよね……？』

もちろん、来るに決まってる！ 目を閉じなくても、理想そのものの顔が目の前にある。私はうっとりとして、三浦先生に見とれていた。何歳くらいなんだろう、二十代半ばく

らい？ テレビに出ている俳優やタレントと遜色ないほどの美形。肌もきれいだし、ちよつと伸びたヒゲもワイルドでかっこいいんだ。

「青木さん？」

「ひゃい！」

あ、またトリップしてた。戻ってきて、私！

「来週の火曜に抜糸をしたいのですが、大丈夫ですか？」

「は、はい、大丈夫です」

来週火曜日、来週火曜日……。脳内メモリーにばっちり記録いたしました。

「時間はどうしましょうか」

「何時でも！」

「でも午前中はつらいんじゃないですか？」

「う、ま、まあ、その」

「午後にしましょう。十五時ならあいていますますが、どうですか？」

「大丈夫ですよ！」

三浦先生は挙動不審な私を前にしても、動じることなく微笑んだ。なんて軽やかな笑顔。心臓に悪いと思う、その笑顔は。

「じゃあ、これ」

「なんですか？」

印刷された紙を渡されて、私はそれをじっと見つめる。

『抜歯をされた方へ』——注意書き、みたいなものかな。お風呂禁止。うがい推奨（しすぎはダメ）。指や舌で患部に触れないように。鎮痛剤は時間を守つてのめ、などなど。『ひどく痛むことも考えられます。あまりにひどい場合は、我慢しないで相談してください』

「は、はい」

「注意事項の下に十七時までつながらる番号と、十七時以降、外来が終わつてもつながる番号がのつていますので、なにかあればいつでもどうぞ」

「ありがとうございます」

つて、お風呂は入れないんだ、シヨック。

『どうせなら、携帯の番号も添えておきたかったんだけどね』

「いやーん、さすがに携帯の番号はいきなりすぎますっ」

「え？」

「え!？」

やばい、妄想が漏れた。慌ててベッドを下りた私は、足元のかごに入っていたコートとバッグをつかんで、頭を下げる。

「ありがとうございますましたっ、ではっ」

そして、逃げるようにその場を去った……。背後で笑い声が聞こえたのは、気のせいだと信じたい！

その夜は、歯の痛みで妄想もあまりできなかった。病院で三浦先生を前にしていたときは、どんなに痛くても妄想を止められなかったのに！ ジンジンと歯茎が痛む。絶え間なく血が出るので、ガーゼを何度も交換するんだけど、それでも口の中が血まみれになる。鎮痛剤のもんでいるのに、痛い！ 冷やすといい、と言われていたので、氷枕に顔をぴとりつけて、ベッドに横になる。うーうー、冷たい。ここまで冷たいと耳が痛くなってくる。でも冷やせばラクになるというのなら、耐えるしかない。

「いーたーいー……」

『かわいそうに、カノン……。その痛みを、僕が代わりに引き受けてあげたいよ』

妄想の中で、外見は三浦先生そのものの『彼』が私の髪を撫でる。あれ、妄想できているってことは、やっぱり冷やして少しはよくなってきたのかな。さっきまでは、妄想する余裕もなかったもんね。

『君が痛みを負けないように、僕がそばにいるからね』

『うん、ありがとう、洋二郎さん』

『痛みを忘れるくらい、激しく抱いてあげたいよ……。君のすべてが欲しい』

『え、待って、今は、そんな！』

『我慢できない、カノン……』

「いや、今はさすがにだめでしよう！」

独り言を声に出してしまい、その口の動きでまた痛みが走る。ばかああああ、いいからおとなしくしてなさいよ、私！さすがに今日ばかりは妄想禁止だわ。歯痛が危険！って、歯そのものはもう抜いたから、歯茎痛？ ああ、もう、どっちにしても危険なんだってば！

そうこうしているうちに、二十二時になった。私はいつもと同じようにリモコンを操作する。ステレオから流れ出すラジオ。

『はい、こんばんはっ。今夜も熱く燃え滾るアナタの心の清涼剤、イニシャルもDJ 神野大都です。火曜日は最年長アシスタント、もうすぐ三十歳だっけ、海ちゃん』

『榎原海です。こんばんは。二十九歳です』

『やーね、気取っちゃって！ ワタシが出会ったところの海ちゃんが懐かしい。あのころの海ちゃんは、かわいかったわ……』

『その言い方だと今はかわいくないっていうことになりそうですけど……』

『今だって海ちゃんはカワイイに決まってるじゃないの。ワタシの次にだけどね？』

『はい、では一曲目の紹介をお願いしますか、神野さん』

『ワタシをスルーするのはやめてちょうだいっ』

海ちゃんはアシスタントの中では、一番クールな印象だ。透明感のあるきれいな声は、さすがアナウンサーって感じ。実際、海ちゃんは見た目もクールビューティで、さらさらの黒髪と、メガネの似合う美女。しかし、私だって毎週この番組に出ているのに、こうして聴いていると、自分が出ていることが嘘みたいな気がするから不思議。

……結局、番組が終わる一時を過ぎても激痛が続き、そのまま眠れずに朝を迎えてしまった。カーテンの隙間から朝日が差し込む。ヤバイ、痛すぎる！ 口の中は血の味があるし、私もしかしてこれで死ぬんじゃないの!? って、このくらいで死ぬわけではないんだけど、もしも歯茎が膿んで腐って顎を削る手術をすることになったら、どうしよう……

『そんなことにはならないよ、カノン。心配しないで。まず眠らないとね。かわいい目が真っ赤に充血しているよ』

その言葉は嬉しいのよ、ダーリン。でも、痛みでネガティブになっているせいかな、悪



いことばかり考えちゃう。このまま私の歯茎が腐った場合、手術にかかる費用は私もちだよな？ 手術費用なんて払えるんだろうか。それが払えなくて治療が遅れたら、私の歯茎はどうなっちゃうの？ もしも手術をしたとしても、そんなひどい状態になったら仕事もできないし、そうなる収入がなくなってしまうわけ……

痛くて眠れないなんて嘘だった。単に前日、病院でぐっすり眠ってしまったせいで眠れなかったみたい。歯茎が腐る恐怖に怯えている間に私は眠り込んでしまったらしく、起きるともう昼すぎだった。氷枕はすっかりぬるくなり、その上に敷いたタオルには血のしみが！ 口の周りを鏡で確認すると、血が乾いてこびりついている。えーと、つまり私は血のよだれを垂らしながら眠っていたと……？ とりあえず鎮痛剤と化膿止めと整腸剤をのまなくちゃ。起きた途端、頬と顎と歯茎と喉と、さらに頭にまで痛みが走る。私はベッドからのろのろと下りて、パジャマのまま階下のキッチンに向かった。

二、三日は痛むと言われていたけど、そんな言葉じゃ足りなすぎるっ。だって、痛いなんてもんじゃなくない!? 口の中にドリルで穴を開けられているみたい痛みが、延々と私を襲う。うーとか、あーとか、おうええええええとか、無意識のうちに声が出るほど痛い。痛いの最上級って日本語でなんて言うのよ！ 我慢していれば痛みもおさまるはずと信じて毎食後に薬をのんで、なにもせずごろごろとベッドで過ごす。だけど

痛い。まんべんなく痛い。あいむふいーりんばっどばっどばっど！

\*\*\*

「おい、なんだよ、その顔。そんな顔で仕事きたわけ？ ありえねえ……」

開口一番がソレって、そっちのほうがありえないでしょ！ 私はギロリと大都を睨む。月曜の十九時、今日の予定を確認したり、打ち合わせをしたりするため、二十二時から番組でも、十八時にはだいたい局に入っているのだ。

「うっさいな。私の顔が悪かろうと腫れてようと、声が出ればいいでしょ、声がないでも喋るだけでかなりの激痛。くそう、今日の三時間をなんとか耐えれば、どうにかなるはずなんだ。だって明日は火曜日、通院の日。抜糸予定って言っていたけれど、こんなこんななこーんなに痛くて、まだ膿や血が出ていても抜糸ってできるんだろうか。声もなんかへんなんだけど。おまえそれ、三時間もつのかよ」

「もたせてみせますホトトギス！」

「おはよー、うわ、奏音ちゃん、顔腫れてない？」

「またもそれか！ スタッフに声をかけられて、私は心の中のため息をつく。どうせ私は右側だけ下膨れ状態の、ブスつたれた顔してますよ。せめてブサかわいってことに